

不空訳『撰無礙経』をめぐる問題

向 井 隆 健

一 はじめに

『撰無礙経』とは具には、『撰無礙大悲心大陀羅尼経計一法中出無量義南方滿願補陀落海会五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持三摩耶幟曼荼羅儀軌』といい、別称『補陀落海会軌』ともいわれ、不空三藏訳として大正大藏経密教部第二〇巻に収められている。不空訳とされてはいるが、これは弘法大師空海の『御请来目錄』にもその名はなく、安然の『八家秘録』にも載らないものであり、入唐八家以後の将来と考えられる。従って、不空訳であっても時代的にへだたりが考えられ、また内容についても、後に論ずるところであるが、不空訳としてそのまま信用しがたいものの一つと思われる。

しかるに、この『撰無礙経』は次に述べる点において、最近衆目的となりつつある。

一つには、石田尚豊氏による『曼荼羅の研究』には、同じ

く不空訳とする『法華曼荼羅威儀形色法経』とともに、現図曼荼羅の所依の經典としてとりあげられている。また、一つには、智山隆瑜の『秘蔵記拾要記』等にも部分的には指摘されているところであるが、『秘蔵記』との文章の一致がみられるという点から種々なる問題が提起されている。

更に考えられようとしているのは、「理と智」「胎蔵と金剛界」の思想が説かれること、或いは『撰無礙経』と類似的性格をもつ『法華曼荼羅威儀形色法経』も『八家秘録』にはなく、また題目が長いことや不空以後のものと考えられる点などから、『撰無礙経』の成立および日本への渡来は比較的後期のものではないかと思われるのであり、今後検討されるべき問題となっている。

このように『撰無礙経』は、いまや重要な役割りを果たそうとしている。その成立年代や将来年次が明らかになれば、『秘蔵記』の成立問題に重要な資料を提供することになり、

また、中国密教史における「理と智」「金と胎」などの不二思想を明らかにすることができ、更には石田氏の『曼荼羅の研究』に本當の意味での重要な資料として位置づけられるものと考えられるからである。

要するに『撰無礙經』自体の究明はこれらの諸問題を解決するための緒となりうるもので大変興味深く感ずるのである。当論はこれらの問題点がどの辺に存するかを検討し、その問題と解決の方向性を示しておきたいと思う。

二 『撰無礙經』と『秘藏記』との関係

『撰無礙經』と『秘藏記』の文章の一致について、筆者はすでに発表したことがあるが、便宜上当論においても記載することにす。しかしここでは、紙面の都合上、中略の形で示し、説明にて重要点を指摘したいと思う。

『撰無礙經』は大正藏經二〇卷の一、二九頁中段から一三八頁上段までの、不空訳としては比較的長訳のものであるが、一三〇頁上段以下は圖像法を説いたものである。そして、最初の部分が大体『秘藏記』に引用されている。また後の圖像法を説くものの中にも『秘藏記』の曼荼羅尊位の図説との類似性をみるものもある。石田氏の研究によれば、『秘藏記』の説明より『撰無礙經』の方が、現図曼荼羅に近い説明がされていると指摘されている。ただしここでは『撰無礙經』の文

章の特に最初の部分に焦点をあわせて検討し、圖像の方は今後の課題としておきたい。

まず、『撰無礙經』の

蓮花合掌者 蓮花即理也 理処必有智 故以左右手 其名曰理智
左手寂靜故 名理胎藏海 右手辨諸事 名智金剛海 左手五指者
胎藏海五智 右手五指者 金剛海五智 左手定右慧 十指即十度
或名十法界 或曰十真如 縮則撰取一 開則有数名（大正二〇・
一一九中一下）

の文章の部分が、『秘藏記』の

「所_レ以先作_二蓮華合掌_一者蓮華即理也。理処必有_レ智故_二二手名_レ理智。左手靜故名_レ理。胎藏也。右手辨_二一切事_一故名_レ智。金剛界也。左手五指胎藏五智。右手五指金剛界五智。左手定。右手慧。十指即十波羅蜜。或十法界。或十真如。縮則取_一。開則有_二無量名_一」（弘法大師全集第二輯、三二—三頁）

に一致する。ここは後にも文章を利用したので中略せずに引用したが、ここで注意しておきたいことは、理と智の関係と、胎藏と金剛界とのことである。また『撰無礙經』では、胎藏海、金剛海と「海」の字を使用するが、『秘藏記』においては、胎藏、金剛界とある点が特筆されよう。

次に『撰無礙經』の「左小指為檀 無名指為戒（中略）左中指為願 無名指為力 左小指為智云々」（一一九下）は、『秘藏記』の「十度。檀戒忍進禪。慧方願力智。（中略）先自_二右

小指「始而可レ数」（二八頁）と左右の五指に配当される名称が一致しない。作者の法流の相違によるものであろうか検討の余地がある。

次に『撰無礙經』の「五部尊法」として、「一息災法用仏部是故有」

五智五智（中略）五鈎召法用羯磨部尊。是故有鈎索鎖鈴等。（二二九下）とあり、『秘藏記』の「以五種法相二宛五部。一息災。用二仏部尊。二母（中略）」

五鈎召。用二羯磨部尊鈎善」（四五―六頁）の部分に相当する。ここでは『秘藏記』にては「相宛五部」として「宛」という字が使われているが、これは和習であるとする説がある。

次に、『撰無礙經』の「入五智法身。是故有五智賢瓶。」被甲变化身。是有三十二身」（二二九下）は、『秘藏記』の「入智身法」被甲变化」（等持印妙觀云々」（四八頁）に相当するが、ここには修法的に五智が拡大解釈されているようである。

次に『撰無礙經』の「五母部室主毘盧遮那如来仏部主源之故無母。譬如毘盧遮那慈。阿字為毘盧遮那仏種子。吽字金剛薩埵種子。金剛頂經。吽字毘盧遮那種子。阿字金剛薩埵種子。金剛海微軌。如是每會。此兩字相代。知是互作主伴利益衆生。滿陀海大悲蓮化亦現万億身。五阿闍如来。金剛部主金剛作主伴接化群生。波羅蜜為母。」（中略）四仏為主。譬如雖父母共産生諸子名父不為母。」（二二九下―一三〇上）の文章が、『秘藏記』においては三カ所に分散して収載されている。即ち、『秘藏記』の、「五部定二母主一如何。毗盧遮那源故無母。」（三九頁）と、「毗盧遮那經。阿字為二毗盧遮那種子。吽字為二金剛薩埵種子。」（中略）金剛界儀軌如レ此。每レ會此二字相代。

当レ知是互作二主伴一之義也」（四六―七頁）と、「阿闍金剛部主。金剛波羅蜜為レ母」（中略）是故不レ得二四波羅蜜為レ主四仏為レ母。譬如雖二父母共産二生諸子一各レ父不レ為レ母」（三九―四〇頁）との三文に分かれていたのである。

次に、『撰無礙經』の「以五智忿怒相配。五智不動尊毘盧遮那忿怒。若菩薩。若善薩。」（中略）馬頭觀音無量壽仏忿怒。自性輪觀世音為主。伴陀羅嚩子尼是白衣觀世音菩薩也。」（一三〇上）の文章は、『秘藏記』の「以五忿怒相二宛五智。不動尊毗盧遮那忿怒。若菩薩。若善薩。」（中略）又馬頭無量壽忿怒。自性輪觀世音。」（四七頁）という文と一致する。しかるにここにも「宛」の字があり、『撰無礙經』には「配」の字になっている点興味深い。因みに原本となった柁尾高山寺の古写本は、配と宛とちよつと間違いやすい書体にみえた。

次に、『撰無礙經』の「三十七尊毘盧遮那仏遍照金剛。已下皆同。四方四仏上」（中略）鈎善源索等持鎖堅持鈴解脫」（一三〇上）の文は、『秘藏記』の「三十七尊金剛名号。毗盧遍照金剛不動南宝西觀淨北羯磨就成金波固堅」（中略）鈎善源索等持鎖堅持鈴解脫」（二六一―七頁）の文に一致するのである。

このように不空訳『撰無礙經』は、經典というよりは儀軌の類であるが、この中『秘藏記』の文章と七―八カ所程全くといってよいほど似た文章が窺えた。これは『撰無礙經』より『秘藏記』への引用と考えられるが、『秘藏記』中には『撰無礙經』の名は示されていない。『秘藏記』にいつ誰に

よって引用されたかがわかれば、『秘藏記』の成立問題は勿論のこと、唐代密教史あるいは日本密教史上において、更には弘法大師教学における『秘藏記』の扱い方などが明らかとなり、名実共に重要な資料となる訳であるが、これは今後の課題となる。

三 『撰無礙経』をめぐる問題

入唐八家の将来でないところの『撰無礙経』の名を最初に見るのは、興然(一一二二—一二〇三)の『五十卷鈔』においてである。そして更に注目すべきは「新撰齋然」という割注がある。これによれば入宋僧齋然(九三八—一〇一六)によって將來された勅版大藏経の中か若しくは書写經典の中にあつたものと興然は理解していたことがわかる。

さて、『撰無礙経』における内容について検討してみたい。まず、先にもふれたが、「理」と「智」がそこに説かれてゐること。更に「理」を胎藏に、「智」を金剛界にあててゐること。第二項における最初に掲げた文であるが、ここには左右の手を理智に配し、あるいは定慧に配し、そして左右の五指に各々金剛界胎藏(界)の五智を配当しているのである。ここで左右の二手に配する意味を考へるに、最初は蓮花合掌の理より起り、理には必ず智があるとして左右の手を理智とするが、ここには少なくとも、金胎を並べて扱ふ思想が

不空訳『撰無礙経』をめぐる問題(向井)

窺える。換言すれば金胎兩立の思想が窺えるのである。「理の処には必ず智あり」とはまさに理智不二の思想であり、金胎不二の思想といつても過言ではない。この金胎不二の思想がこれほど明確に説かれてゐるということは、不空三藏の時代には未だみられないところである。不空訳の中には、両部思想の萌芽はみられるが、これだけはつきり打ち出されるのは惠果和尚の時代、或いはその後のものと考えられる。

また、ここで注意しておきたいことは、「界」を「海」と使用する例は、密教思想史上大變ユニークと考えられる。『撰無礙経』という儀軌の成立年代における作者の背景思想として、「界」を「海」と理解する思想があるいは法流継承の中に伝えられていたとも考えられる。

以上要するに、石田氏の研究における『撰無礙経』をそのまゝ、現図曼荼羅の所依の經典と扱ふことは、資料的に危険であると考へられる。しかしこれによって石田氏の研究が損われるわけではない。

また、『秘藏記』の成立に関する従来の説に、『撰無礙経』の成立年代を加味した考察が今後必須となるであろう。かつ、『撰無礙経』は「理と智」の問題をも含む重要な資料であり、密教思想史上重要な文献であるということが理解しうる。(紙数の関係で注を割愛した)

(大正大学助手)